29P-0963

肌状態と不定愁訴との関連性、及び漢方医学的体質の影響

◯遠野　弘美[1], 藤田　日奈[1], 与茂田　敏[1]([1]クラシエ製薬漢方研)

【目的】肌状態は，紫外線や乾燥などの外的要因の他に，ストレスやホルモンバランスのような個人の体質に起因する内的要因など複数の因子が関与すると考えられる．今回，肌の症状の発症リスク（肌リスク）が高い危険因子を調べる目的で，アンケート調査を実施し，「疲労，不眠および更年期症状」の各不定愁訴と肌状態との関連性を解析した．また，これら不定愁訴に漢方薬を用いる場合に処方選定を明確にする目的で，不定愁訴と肌状態の両方に影響する漢方学的体質（以下，体質と略す.）について解析した.【方法】2009 年 12 月から 2010 年 2 月の期間に，20 歳代から 50 歳代の女性 149 名を対象にアンケート調査を実施した．統計解析は Stat view を用いて，単変量ロジスティック回帰分析により，不定愁訴および体質の肌リスクを推定すべくオッズ比（OR）を算出した．更に多変量共分散分析により，不定愁訴と肌状態の両方に深く関わる体質を抽出した.【結果】1)「疲労」は「肌のざらつき」の肌リスクが高く（OR=4.7），気虚および血虚体質との関係が有意であった．2)不眠症状では，「寝つきが悪い」と「色素沈着」の肌リスクが高く（OR=6.7），血虚および気虚体質との関係が有意であった．また「睡眠中に覚醒する」と「肌のざらつき」の肌リスクが高く（OR=1.9），お血，血虚および気虚体質との関係が有意であった．3)更年期症状では，「興奮し易くイライラ多い」と「乾燥肌」の肌リスクが高く（OR=44），血虚体質との関係が有意であった.【考察】漢方治療により女性特有の不定愁訴の軽快と同時に肌状態の改善を自覚するためには，体質を考慮した処方選定が大切である．今回の解析手法を用いることで，体質による症状の発症リスクが明確になり，自覚症状が漢方薬選定の手がかりになることが示された.